



川崎誠治
学校法人川崎学園 理事長

かわさき・せいじ氏

1962年 生まれ
1986年 岡山大学医学部卒業
岡山大学医学部第二外科教室入局
1990年 岡山大学大学院医学研究科修了
1995年 岡山大学医学部附属病院助手
1996年 川崎医科大学講師
1998年 川崎医科大学副学長
川崎医科大学附属病院副院長
2000年 学校法人川崎学園副理事長
2012年 学校法人川崎学園理事長

医療・福祉の現場を支える専門職を育成

学校法人川崎学園は、創設者の川崎祐宣（初代理事長）が1938年に岡山市で開業した、外科昭和医院、翌年に開院した外科川崎病院（現在の川崎医科大学総合医療センター）をルーツとしています。

教育の歩みは、当時の医師不足と一部の医師のモラル低下を憂い、自ら医師を養成しようと、1970年に川崎医科大学を開学したのが始まりです。戦後初の新設医科大学4校のうちの1つとして、先陣を切るようになりました。医科大学開学と同時に、医科大学では唯一だと思えますが、附属高校も開校します。これは創設者が開学当初から9年一貫で医療人を育てたいと頑張っていたためです。

1973年に川崎医療短期大学を開学します。今でこそチーム医療は当たり前ですが、当時からそれを目指し、看護師、臨床検査技師、診療放射線技師等のメディカルスタッフ養成をスタートします。翌年には専門学校川崎リハビリテーション学院を開校しました。

1991年に開学した川崎医療福祉大学は、1956年に開設した総合福祉施設「旭川荘」を原点としています。医療福祉大学は、医療福祉という名称を大学名として国内で初めて用い、「医療と福祉は一体でなければならない」と、医療福祉の総合的なサービスを提供できる人材養成をしています。

また、1973年に開院した倉敷市の医科大学附属病院（1182床）に加え、2016年には川崎医科大学総合医療センター（647床）を開院し、最先端の医療と教育が行える環境を整えました。現在では5つの教育施設と2つの附属病院を持つ、多職種の高度な知識を持った医療人の育成を行う総合学園として、4万人近い卒業生を輩出し、地域医療に貢献しています。

多職種の医療専門職を育成

そもそも、この学園は医療福祉の現場で働く仲間を育てたいという思いでスタートしたので、医師をはじめ看護師、臨床検査技師、診療放射線技師、臨床工学技士、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、介護福祉士等の国家資格を有するメディカルスタッフのみならず、

メディカルソーシャルワーカー、医療情報技師、医療秘書等を幅広い分野で、専門性の高い医療福祉人として育成しています。その中で大切にしているのが、学園の建学の理念「1. 人間（ひと）をつくる、2. 体をつくる、3. 医学（学問）をきわめる」です。これは、川崎病院時代からのモットー「全ては患者さんのために」がベースになっています。まずは患者さんに信頼される人間性の豊かな人にならないといけない。次に医療福祉の現場は非常にハードワークなので、それに耐えられる体と精神力を身につけること。その上で、特に専門的な知識と技術が要求される分野なので、当然ながら医学・医療福祉学を究めるといえるものです。なかでも、臨床現場に強い医療職になるために、2つの附属病院でしっかりと実習トレーニングを積むことが一番重要だと考えています。

また、「患者さんのため」が原点なので、医療の現場でニーズがあれば、速い対応で人材育成を行って来ました。例えば、医科大学に救急医学教室を開講したのは本学が初めてで、ドクターヘリも我が国で最初に導入しました。総合医育成のために総合診療部を置いたのも本学が初めてですし、リハビリテーション教室も全国で最も古い教室の1つです。新しいものでは、脳卒中医学教室や新生児学教室を作ったことも挙げられます。

医療福祉大学にもユニークなものがあります。医師の診療や研究のサポートを行うクリニカルセクレタリーを養成する医療秘書学科や、手術書や解剖書を描くメディカルイラストレーションコースをもつ医療福祉デザイン学科は他に例をみません。

素早い対応を可能にする医局の垣根を作らせない仕組み

このように、医療現場のニーズに素早く対応できるのは、学園のガバナンスの特性によるものです。医科大学を新設するにあたり、海外の教育現場を見てきて、日本の当時のやり方の課題を解決しようと取り組みました。多くの医学部では医局が縦割りで、1つの病気に対し、外科は外科、内科は内科と別々の組織で教えてい

ますが、本学は教育研究の垣根を最初から作らせない仕組みでスタートし、臓器別、機能別に、各教室が協力しあっています。また、それぞれの専門分野のスペシャリストが、学園の全ての学生に専門性の高い教育を行っています。

学園創立50周年に向けて改革を推進

大学の評価というのは、卒業生がいかに地域に貢献しているかで決まるのだと思います。現在4300人以上の医師をはじめ、4万人近い卒業生が地域の医療・医療福祉の場で活躍してくれています。卒業生の子弟が母校を志願してくださるのは、満足度や評価の高さを物語っているのだと感じています。高度に専門化する医療の職種のなかに、こんなにやりがいのある職種があるのだということ、どれだけ若い世代に知っていただけるかが、我々の今後の課題です。

2020年には学園創立50周年を迎えます。それに向けて、我々の建学の理念を引き継いでくれる若手教員の育成も大切なことだと考えています。そのために、学園で働いているメディカルスタッフが、在職しながら大学院に進学し研究業績を積み上げ、学識と能力を培う制度を発足しました。

さらに、日々高度化する医療に対応するため、医療短大から医療福祉大学への学科移行を進行中です。2005年に医療秘書学科、医療福祉デザイン学科、2007年の臨床工学科に続き、今年4月には子ども医療福祉学科、臨床検査学科、診療放射線技術学科を移行・設置しました。医療福祉大学は、3学部15学科の医療福祉の総合大学に発展しました。今後の展望としては、学部・学科が増え、多岐にわたるので、教育体系の見直しが必要ではないかと考えています。

また、来年4月には幼保連携型認定こども園を開園します。そこで、今年4月に設置した子ども医療福祉学科の実習の充実化を図るとともに、実習トレーニングの一層の強化を進め、これからも、臨床現場に強い医療福祉の専門職を養成し、地域に貢献していきます。

